

兄・信行を偲ぶ

理事長 長戸路 政 行

このたび、貴誌におかれて、亡兄長戸路信行のために追悼特輯をして下さるとのこと、何と御礼申し上げてよいかわかりません。故人にとってもこの上ない喜びと存じます。故人ともども改めて感謝申し上げます。

亡兄は昔の中学四年生のときに結核を患い、以後14、5年も療養生活をし、その間にカトリック神父とめぐり合い、カトリックに入信し、さらにフランス語を修得しました。彼の肺は半分近くも機能していなかったようです。ですから、坂道や階段を上るのが大の苦手でした。マラソンなどは全くダメでした。人間、健康だったらそれ以上は神様に文句をつけてはいけないよ、とよく言っていました。食事をおいしく頂けて、夜はよく眠ることができ、その上、坂道や階段をすたすたと上ることができたら、もう、その人は幸福な人生を享受しているのだ、と言いたかったのだと思います。

しかし、そのようなことを言いながら、彼は世を逃れて隠遁生活に入るようなことはありませんでした。むしろ、陽気で人を笑わせることが好きでした。私から言わせれば、むしろ、軽薄で不用心なところがありました。それにしても、病気のためにあと1ヶ月の命と宣告された人間があれだけ明るく酒を飲んで騒いでいられたものだと感心することもありました。本当に悟った人間だったのだろうかと考えることもありますが、しかし、やはりそういう性格だったのだらうと思います。

その性格を角度を変えてみますと、彼はまさに散文的であったと思います。ですから、重厚な学術研究や資料収集は不向きであり、短歌や散文、

そして翻訳も好きであったようです。短歌については、昔、朝日新聞の歌壇に入選したことがありました。しかし、それもそれ以上、和歌の追及はしなかったようです。彼が死に至るまで続けていたのは翻訳と生徒向けのエッセイでした。そのエッセイのなかに野の花という一文があります。これは、彼の学園追悼式のときに出版社の社長が朗読してくれたものです。その一部を再録させていただきます。

「ある新聞記者が昭和天皇のまえで雑草という言葉を使ったら天皇は、君、雑草というものはないのだよ、とおっしゃったそうである。動植物のお好きな天皇だったから、さもありなんと思われる話で、これは当然、野草と言うべきところである。(中略) 野草の花をルーペでのぞいて見ていると、その美しさにびっくりする。こんなにも小さな、何処にでもあるような、人が平気で踏みつけてゆく花がこんなにも精巧に調和のある美しさを持っていることに、時として信じられないような気持になる。神の傑作とはこのことなのかと思う。野の百合を見よ、ソロモンの栄華の極みにだにこの百合のひともとに過ぎざりき、という章句が感銘深く思い出される」と。

これは平成六年三月に故人が書いたものです。入院の一ヶ月前のことです。彼は最後までロマンチストでしたが、それは教育者としての大事な一条件ではあったと追憶しております。